

藤善眞澄名誉教授の御逝去を悼む

松 浦 章

藤善眞澄名誉教授が、二〇一二年二月八日に七七歳で御逝去された。藤善先生は奥様に「葬儀は家族で行い、初七日を過ぎて東洋史の先生方に連絡するように」と御遺言されたようで、先生の御逝去をお聞きしたのは数日後であった。御逝去を聞いた我々、新谷英治、藤田高夫両教授そして東洋史同窓会会長の河崎章夫氏とともに京田辺のお宅にお邪魔したのは二月三日のことであった。御自宅の先生の書齋に近い二階のお部屋に御遺影が安置されていた。我々はお線香を御供えするしかない対面であった。

先生は四〇歳代の頃より、体調を壊され、病気を治癒されながら、休職されることなく七〇歳で退職されるまで、大学の業務に精勤された。私が関西大学に勤めるようになった頃は、藤本勝次先生や大庭脩先生が、お元気で大学の様々な役職に就任され忙しくされていたので、東洋史の学生達の指導は、藤善先生と私の仕事であった。

藤善先生は、小柄であられたが、気持ちは「薩摩隼人」そのもので、藤本、大庭両先生にも、遠慮無く直言される大丈夫であった。しかし、学内の役職に就任される話があると、必ず固辞されるお姿をしばしば見かけた。大学院部長や東西学術研究所の所長となられたのは、両先生が御退職の間際か、御退職後であった。遠慮される先生を側で見て、じれったく思ったことも多かった。ところが両先生の御退職後の後任人事に関しては、両先生に対して「御退職される方が、後任人事に口出しされないように」と明確におっしゃり、お人柄や年齢構成を考えられ、優秀な若い人材を見出された。

先生は、若い頃に自動車の免許を取得され、恩師の宮崎市定京都大学教授の御退職の折りに、研究室から宮崎先生の御自宅へ書籍を運ばれたことがご自慢で、何度かお聞きし



1981年4月23日
寧波から鎮海へ甬江を往復した際の艇船にて

た。

先生が運転される車に二、三度乗せて頂いたが、運転の出来ない素人から見てもお上手であった。しかしパソコンはあまりお上手ではなく、研究室のパソコンは、専ら院生や学生が、先生の御用を承る際に利用されることが多かったようである。先生のパソコンを使ってお手伝いした院生、学生は数多い。

一九八一年四月二〇日から五月四日にかけてほぼ二週間の中国調査が行われ、三上次男東京大学名誉教授を団長に佐久間重男副団長、大庭脩秘書長そして団員に斯波義信氏等からなる日中貿易史学者友好訪中団として、団員に先生とともに加えて頂き、上海から中国に入り、寧波（写真参照）、杭州、厦門、泉州、福州、広州、深圳を経て香港から帰国した。今のように高速道路、高速鉄道が整備されてはなかったもので、長距離列車の移動が普通であった。杭州から厦門まで約三二時間の旅であった。前日の杭州から乗車して、金華や江西省の一部を通り、列車は閩江上流で福州方面と分かれ、福建中部から南部へと進んだ。確か厦門附近に流れる九龍溪の上流域で早朝であったと思われるが、起床すると既に藤善先生は通路の椅子に座られ、カメラを持たれ中国の風景を全て撮りつくすような勢いで撮影されていた。この時は、文献に見られる川舟を並べて作った浮橋や九龍溪を遡航する帆船そして、厦門附近では農村の臨時の劇場の光景など、思い残すこと無く撮影された。別の機会に陝西方面に行かれた時も、バスで移動中に横で寝ている院生を尻目に黄土草原を隈無く撮影されたとお聞きした。先生はその後も何度も中国調査に行かれたが、行かれるたびに膨大な量の写真撮影をされた。それは、先生が、京都大学人文科学研究所の森鹿三先生のもとで、中国歴史地理の経典とも言うべき酈道元の『水経注』の研究をされていたからであろう。同書は、森先生等とともに平凡社の中国古典文学大系二一（一九七四年）に収録されている。『水経注』に関する成果としては清末の楊守敬等の『水経注疏』が高い評価を得たものであるが、一九八一年の中国調査で懇意になられた当時の杭州大学歴史系の歴史地理の大家陳橋驛先生に、台湾版の『水経注疏』を送られるなどされた。中国からの留学生のお世話も随分された。研究の土台となった中国は、こよなく愛されていた。

藤善先生は、京都大学大学院の院生時代に人文科学研究所の研究班で、中国研究の基礎を徹底的に学ばれた関係から、緻密な訳注が研究の手法の一つであった。関西大学就任後に出版された最初の大きな成果が趙汝适の『諸番志』の訳注であり、『諸番志（訳注と研究）』（関西大学東西学術研究所、一九九一年）として刊行された。英訳本はあったが、日本語訳では最初の緻密な注釈のある翻訳書であり、学会から高い評価を受けられた。

先生の晩年の大きなお仕事の一つが、成尋の『參天台五臺山記』の研究である。成尋が六〇歳を過ぎて宋にわたり九年もの間、宋に滞在し、最後は開封の開宝寺で没するまでの漢文で記された記録に着目して研究された。それに十数年をかけて訳注を施され、その過

程で生まれた研究成果が『參天台五臺山記の研究』（関西大学出版部、二〇〇六年三月）であり、上下二冊からなる訳注『參天台五臺山記』（関西大学出版部、上冊が二〇〇七年一月、下冊が二〇一一年三月）であった。藤善先生の教えを受けられた王麗萍女史による『新校參天台五臺山記』（上海古籍出版社、二〇〇九年十一月）校訂本とともに、今後の『參天台五臺山記』研究にとっての必読書となった。

先生はこの他、六朝時代から唐宋時代にかけての仏教史や文化史に関して多くの業績を上梓されたが、その片鱗は『道宣伝の研究』（京都大学・東洋史研究会、二〇〇二年）や『中国史道遙』（藤善眞澄先生古稀記念会、二〇〇五年）に見られる。しかし、先生の名声を高からしめたのは、『安祿山』（人物往来社、一九六六年）で、若干三〇歳そこそこでまとめられ、近年中公文庫の一冊として加えられ今なお多くの人々に読まれている。

藤善先生は一九九七年一〇月から二年間にわたり、関西大学大学院部長をされたが、その間に、大学当局の協力を得て大学院学舎尚文館の建設に尽力された。学舎名の尚文館は、先生が中国古典に典拠を求められたと聞いている。名前の通り、多くの院生達が、今も遅くまで研究活動に邁進する環境を整備するために尽力されたのであった。

二〇〇一年四月から四年間にわたって東西学術研究所の所長となられたが、文部科学省に私立大学学術高度化推進事業の申請に関して大学当局の理解を得て、藤田高夫教授とともに奮闘され、二〇〇五年にアジア文化交流研究センターが設立される契機を作られた。同センターは、その後研究を推進し、二〇〇七年には関西大学では最初のCOEプログラムとなるCOEプログラム「関西大学文化交渉学教育研究拠点」の選定を受け、次いで二〇一一年にはアジア文化研究センターの選定を受けるなど、関西大学におけるアジア学の礎を築かれたのであった。

藤善先生のご研究で一貫しているのは、京都大学大学院の時代に培われた中国学の方法の堅実な取得であった。ご自身の死期を感じられ、葬儀も御家族で行うようにとの御遺言されたように、人として堅実で着実な生き方を実践されてきた。その典型的な人生であったと思われる。

藤善先生のご冥福を祈念するとともに早き御逝去を惜しみつつ筆を置きたい。

（関西大学文学部教授）